

金沢市立玉川図書館近世史料館展示

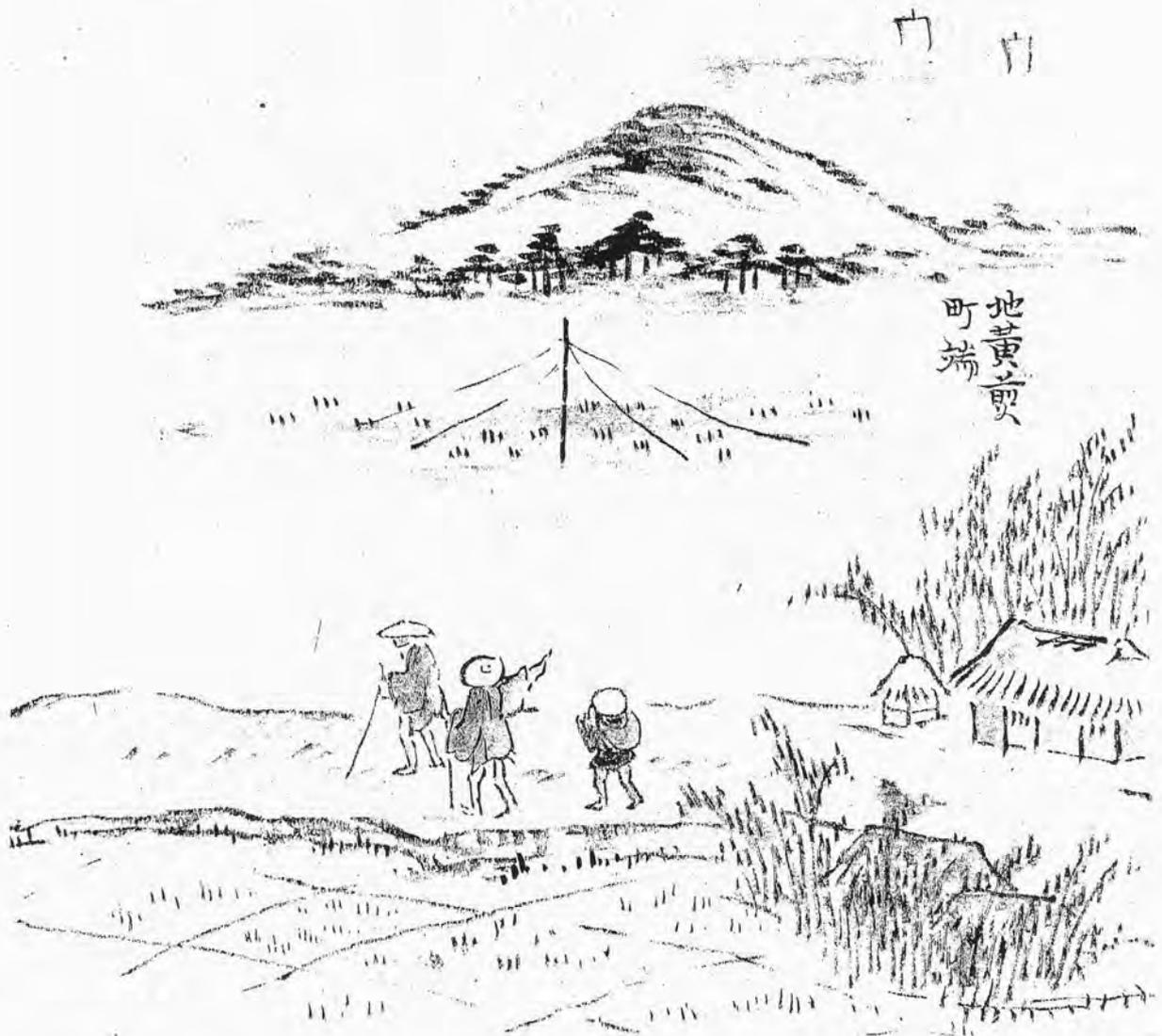
北 国 紀 行

—紀行文に見る旅と文芸—

平成15年11月18日(火)～平成16年1月18日(日)

(12月29日～1月4日は年末年始につき休館)

近世史料館 1階展示室



地黄煎
町端

「吉野十景巡見記」(16. 93-39)より

〒920-0863石川県金沢市玉川町2-20

金沢市立玉川図書館近世史料館

TEL(076)221-4750

展示によせて

当館では、本年度の展示において「江戸への道」「京・大坂への道」、特別展として「加賀・能登の海路」と、旅と交通を中心にした展示をしてきました。

今回はこれらを受けて、「旅」の中で紡がれた「紀行文」を取り上げ、歴史史料・地誌史料という面のみではなく、近世文学史料としての面からも紀行文を見ていただければと考えています。

本館所蔵の紀行文

紀行文が生まれる前提として旅があります。今回展示した史料の過半は職務に関わる旅ではありますが、中には個人の意志による「旅」も見られます。それらの目的は、登山・湯治・歴史探訪などであります。

「旅」の動機はそれぞれ異なりますが、そこで記される題材は名所・旧蹟に関するものが圧倒的であり、それら名所・旧蹟の記述の中に和歌・漢詩・漢文・俳文などが盛り込まれ、地誌、道中記としての情報と共に文学的な要素も認められます。

また、これらは、随筆・日記・備忘録の要素をも有し、極めて多様な性格を持ちます。この多様性は史料として色々な面からの利用が可能だということでもありましょう。

金沢から石川郡へ

- (1) 東北道記 前田知頼 著 宝永元年(1704) 16.93-13
金沢より中宮温泉への往還記。中宮温泉到着後の「中宮在湯日記」も付されている。
- (2) 白山遊覧図記 金子有斐 著 文政12年(1829)江戸増島石原 序 16.93-26
著者が、白山登拝の順路にある神祠・史蹟などと共に各所の図を付して作成した「白山史」を天明6年(1786)に改訂したもので、白山に関する地理、史蹟が紹介されている。
- (3) 吉野十景巡見記 矢田四如軒 著 寛政4年(1792) 090-253/16.93-39
別名「吉野邸領十景紀行」「吉野十景遊覧図記」。
著者が75歳の時に吉野十景を巡覧したもので、著者は狩野派の画を学んでおり、紀行地の風景も多く描かれている。
- (4) 大野郷訪古游記 津田鳳卿 著 年未詳 16.93-37
大野郷内の諸村を巡り、旧蹟等について漢文体で記したもの。本書中には、他に「遊梅田洞記」「椋部考古游記」「笠間郷游記」も収録されている。
津田鳳卿は藩校明倫堂読師や書物奉行を務め、博学で知られた。

金沢から能美郡へ

- (5) 小松近郷巡覧記(「紀行七種」) 著書不明 文久3年(1863) 16.93-34

金沢から鶴来を過ぎて三坂峠越えて小松に至る村々の歴史などが記される。他に「金沢より小松迄道程之記」「小松ヨリ上口越前境迄之記」「小松ヨリ広瀬橋通金沢エ之記」「吉崎道之記」「小塩橋立之記」「吉竹村道之記」が収録されている。

金沢から江沼郡へ

- (6) 江沼郡奥山遊覧之記 横山政和 著 慶応2年(1866) 16.93-32④
小松を基点として江沼郡内を遊覧した道中記。附録として「山中温泉湯治養生巻」
などが付されている。
- (7) 山中行記 著者不明 年未詳 16.93-38
金沢泉出町から小松・動橋と北陸道を通り、大聖寺の手前で山代・山中に至る道中
記図。
行程・距離と共に各地毎に漢詩が付されている。

金沢から能登へ

- (8) 三日月の日記 浅加久敬 著 元禄9年(1696) 16.93-10
元禄9年4月3日より5月28日までの能登行の紀行で、6月3日に道すがら書留め
たものをまとめたとされ、これから標題が「三日月の日記」とされたという。
- (9) 能州紀行 森田盛昌 著 享保2年(1717) 16.93-12
著者が出船御用として能登口郡を巡回した時の紀行で、名所・旧蹟が詳しく記述さ
れている。同年3月10日金沢を発し、5月30日に金沢に戻る旅程であった。
本書には、他に同じく森田盛昌の著による「能登一覽記」も収録されている。こちら
は宝永元年(1704)に能登四郡を巡った時のもので、神社仏閣等の来歴が詳しく記
され、また毎日の天候も記され旅日記の様を呈している。
- (10) 能登游記 金子有斐(鶴村)著 文化13年(1816) 16.93-23
能登一周巡覧の漢文体紀行日記。
金子有斐は、藩士今枝氏の儒者で画もよくした。
「白山遊覧図記」(目録番号(2)を参照)などの著書もある。

- (11) 能登日記 (乾坤2冊) 田辺政巳 著 文化 14 年(1817) 090-600
文化 14 年 10 月 1 日より同月 22 日にかけて能登を巡った紀行で、名所・旧蹟の記が多く、地誌史料ともなるものである。
- (12) 老の道草 (5冊) 上田 耕 著 天保 6 年(1835) 序 16.38-27
全十巻5冊からなる能登・越中を旅した時のもので、一般的な紀行文とは異なり著者の思い・考えがテーマ別に記される。
なお、同著者によって「再々篇 老の道草」(5冊 16.38-28)が嘉永5年(1852)に編されており、これは有馬温泉への紀行である。

金沢から越中へ

- (13) 登立山記 源 士業 著 天保 11 年(1840) 16.93-28
士業をはじめ7名で立山に登った時の記で、漢文体で著されている。
- (14) 蟹谷郷游記 津田鳳卿 著 年未詳 16.93-42
蟹谷は越中国砺波郡蟹谷郷で、この地の諸村の旧蹟等をたどり、漢文体で著したもの。
他に「游三国嶺記」「自生山那谷寺記」なども収録されている。

金沢から木曾路へ

- (15) 木曾路記 竹田昌忠 著 寛延 4 年(1751) 16.93-18
藩士の江戸参勤に供奉しての記である。この年は、越後の海辺道が荒れて通行困難のため木曾路を通行している。
- (16) 木曾路乃記 広瀬定栄 著 弘化 4 年(1847) 16.93-29
藩主の参勤供奉の紀行。この年信濃路は、地震のため宿駅も被害を受けたため、越前・近江・美濃のコースをとっている。

- (17) 木曾路紀行 横山政和 著 安政5年(1858) 16.93-32①
藩主参勤の供奉に伴う金沢～江戸間の紀行で、途路各地において漢詩・和歌をも
って構成されている。

金沢から信濃へ

- (18) 善光寺紀行(「松雲公採集遺編類纂」176)
 堯恵法印 著 寛正6年(1465) 16.03-1
 本書は、鶴来金劔宮の社僧堯恵が、寛正6年に誓願を立て、信濃善光寺へ向かう
 紀行である。
 「松雲公採集遺編類纂」巻176は詩歌之部で、本書の他に同著者の「北国紀行」
 (越中・越後の旅)、聖護院道興准後の筆記になるといわれる「廻国雑記」(越前・加
 賀・能登の旅)も収録されている。

金沢から京へ

- (19) 老ての京のぼり 今枝直方 著 宝永7年(1710) 16.93-14
 中御門天皇即位の祝儀に前田家の使者として京都に赴いた時の紀行。
 今枝直方は加賀藩家老。他に聞書等の著作も多い。

金沢から江戸へ

- (20) 寛文東行記(「松雲公採集遺編類纂」180)
 訥斉 著 寛文9年(1669) 16.03-1
 別名「寛文紀行」。加賀藩の儒者沢田宗堅の著になるもので、訥斉は宗堅の号。
 寛文9年3月、五代前田綱紀の江戸参勤に先だって江戸へ向かった時の紀行であ
 る。
 「松雲公採集遺編類纂」巻180は詩歌之部で、本書の他に沢田宗堅「庚戌北遊記」
 (京～金沢)、葛巻有禎(昌興)「能登紀行」・「北陸紀行」(江戸～金沢)・「北州紀
 行」(江戸～金沢)、沢田菖庵「東行記」(金沢～江戸)が収録されている。

- (21) 有沢紀行集(9冊) 有沢永貞・武貞 著 寛文 ~ 享保 16.93-8
藩の軍学者であり、御細工所の奉行を勤めた有沢永貞・武貞親子の江戸～金沢間の紀行集。ここでは武貞が15歳となる元禄9年(1696)に初めて江戸に向かう時の「元禄九丙子年紀行」を紹介した。
- (22) 壬申紀行 今枝直方 著 元禄5年(1692) 16.93-7
公務によって金沢より江戸に向かう旅の紀行。文中には寺社境内・風景などの図も付される。
- (23) 東海道通行記(上・下) 屋漏堂(村井氏) 写 享和2年(1802) 16.93-22
藩主が東海道経由で江戸から金沢への供奉通行記で、泊地・小休所・天候や名所・旧蹟が記される。下巻が袋井より金沢までの部分となる。
- (24) 甲辰紀行(「松雲公採集遺編類纂」179) 有沢貞幹 著 天明4年(1784) 16.03-1
江戸より金沢に至る紀行で、本書「松雲公採集遺編類纂」巻179では、儒者木下貞幹(順庵)の著としているが、藩士有沢貞幹の著作とされる。
閏1月3日江戸を発ち、16日に金沢に至っている。

江戸から金沢へ

- (25) 越の山文 前田隆(真龍院) 著 天保9年(1838) 16.12-118・119
別名「真龍公自東都至金城の御紀行」、「真龍院君道記」
十二代齊廣(なりなが)室が天保9年8月4日江戸を発ち、下街道を通り同月22日金沢に至る紀行を著したものである。

参考資料

- (26) 東路記 前田まつ著 慶長7年(1602) 16.12-49
「高祖妣御記」とあり、前田利家の正室まつの著とされる。
内容は伏見から江戸への道中記であり、これは慶長5年(1600)の関ヶ原合戦を迎えるにあたって徳川家康が前田利長の母(まつ)を人質とした時のものであり、慶長7年9月の記となっている。
本書は北陸域にかかるものではないが、藩主一族の道中記として出展した。
- (27) 奥のほそ道 松尾芭蕉 著 (元禄15)京井筒屋庄兵衛 刊 098.8-13
「奥のほそ道」は元禄6年(1693)に清書本ができたとされ、元禄15年(1702)には井筒屋庄兵衛が刊行しており、本書も同書肆の板によるものである。
- (28) 奥の細道 画卷(複製) 郷土出版社 平成元年(1989) 721.7-才
松尾芭蕉-原文 与謝蕪村-書・画

関係絵図

- (29) 道中独案内図 須原屋茂兵衛等 文政11年(1828)改正 096.9-107
- (30) 加越能合図 年未詳 19.9-173
- (31) 加賀国白嶺之図 白雲齋可山 写 安永2年(1773) 大1085
- (32) 能登図 上野連英 写 安政2年(1855) 098.0-5
- (33) 越中国立山禅定名所附図別当岩峯寺 年未詳 098.0-1
- (34) 江戸絵図 江戸須原屋茂兵衛 刊 享保17年(1732) 22.2-91
- (35) 信濃国善光寺略絵図 英泉 画 七泉堂 出版 年未詳 18.9-109